

世界の視点から見た四国遍路の魅力：西洋人遍路を例として

徳島文理大学 講師 モートン常慈



(この原稿は『四国遍路と世界の巡礼』第1号(愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、2016年3月)掲載論文を当センターで要約したものです。)

1. はじめに

2015年の秋、複数人の外国人遍路から、以前と比べて自分たちと同じ外国人遍路の姿を見かける事が最近かなり増えたという話を聞いた。どうして、最近、外国人の間で四国遍路への関心が高まってきたのだろうか。世界の視点から見て四国遍路の魅力は何だろうか。本稿では、外国人、特に西洋人を例として、彼らにとっての四国遍路の魅力、実態(人数、国別、男女の比率、動機など)や問題点を考察する。

2. これまでの外国人遍路についての研究

初めての研究プロジェクトは、徳島在住(当時)のフィオナ・マグレガーによるものである。彼女は、2000年の3月-4月と2001年の2月-3月に日本人と外国人遍路にアンケートを記入してもらい、その結果を2002年1月に「四国遍路における日本人と西洋人遍路の比較」という修士論文で発表した。

次は、2005年に著者が「外国人の目から見た(四国)遍路」という論文に、外国人の人数、国別、四国遍路の情報源、遍路の魅力、四国遍路についての感想をまとめた。人数や国別のデータは香川県にあるおへんろ交流サロンからのもので、そこを訪れた人数は、平成14-15年は30人、15-16年は62人、16-17年は40人だったことが分かった。また、そこにある「国際納札箱」に入れられていた35枚の納札を国別に分けた。その結果は、国数は12か国で、アメリカが12枚、カナダが7枚、韓国と中国が3枚、イギリスとインドネシアが2枚、オーストラリア、スイス、ドイツ、スペイン、オランダとタイが1枚だった。また、当時行った聞き取り調査によると、西洋人にとっての四国遍路の魅力は3つで、自由さ、お接待(文化)、とコストだった。そして、感想と

しては、次のようなものがあった。「四国遍路の経験すべてがとても良かった」、「私の巡礼は冒険がいっぱいで、人生を変える経験だった」、「外国人遍路が少ないのびっくりした」、「四国霊場の歴史、文化などを説明するもっと良いガイドブックが欲しい」。また、四国遍路をもっと宣伝した方が良いとの質問については、「Yes」は6人、「No」は7人、未定または両方は3人だった。

その5年後、早稲田大学の社会学教員が外国人遍路の実態を調べた。2011年5月から2012年1月の間、189人の日本人遍路と29人の外国人遍路のデータを集めた。それによると、外国人遍路の場合、国籍は欧米諸国が多く、女性外国人遍路は4割、年齢は若年層、学歴は高く、宗教保持者が多く、日本在住者は1割であった。「歩き遍路」は約2割、無料宿泊率が高く、また6割は「友人・知人」、3割はインターネットから四国遍路を知った。そして、四国遍路の世界遺産化運動に関しては、7割の外国人遍路が賛同した。

そして、2012年に浅川泰宏氏(現在：埼玉県立大学准教授)は、「遍路姿の外国人を見かけることも増えてきた」と述べ、どのくらいの外国人遍路が来ているかを把握するため、徳島南部にある「牟岐町お接待の会」の「訪問台帳」を調べた。2001年3月から2012年5月の分を調べた結果、244件は外国人遍路だと分かった。それをさらに分析すると、次のことが明らかになった。欧州・北米が圧倒的に多い、2008年の人数は2001年の8倍だが、その後減少する、若年層が多い(20代-40代が6割)。

3. 現代外国人遍路の実態

ここで、人数、国別、男女比率、年代別、四国遍路を知った経緯、四国遍路の動機などを述べたいと思う。その情報源は、著者が2005年から行っている聞き取り調

査（メールか実際に会ったときの回答）、1番札所の前にある「門前一番街」という遍路用品店、6番札所安楽寺、香川県のおへんろ交流サロンや仁庵接待所、そして英語版のガイドブックの販売歴など。しかし、著者はアンケート調査をしていないので、四国遍路を知った経緯や動機についての統計（%または、人数）は不明である。

(1) 四国遍路を知った経緯

回答は主に3つのカテゴリーに分けられる。1つ目は口コミである。遍路を体験した外国人が時々母国で講演をしたり、知り合いなどに遍路の体験を伝えることによって遍路情報が普及している。2015年2月に「バリ日本文化会館」で遍路のイベントがあり、遍路の研究者や遍路を体験したフランス人が遍路に関する研究や体験について語った。2つ目は、新聞やガイドブックなどの出版物である。最近、多くの外国人記者が四国遍路についての記事を母国の新聞等に載せている。例えば、2005年に、あるカナダ新聞記者が彼の遍路体験記を10回に分けて、カナダの「Ottawa Citizen」という新聞に大きく載せた。3つ目は、ラジオ、テレビ、インターネットなどのメディアである。これまで海外の制作会社によって、様々な遍路ドキュメンタリーが作られてきたが、2014年には、NHK ワールドの「Asia This Week」というニュース番組で、四国遍路のことが130か国で紹介された。また同年12月、アメリカのPBS テレビ局で「Sacred Journeys」（神聖な旅）という巡礼シリーズが放送され、アメリカ全体に四国遍路が紹介された。

(2) 人数・国別

外国人遍路の人数を把握するためには、宿坊、おへんろ交流サロン、霊山寺の前にある「門前一番街」店のデータが参考になる。宿坊を運営している安楽寺によると、2011年 - 67人、2012年 - 97人、2013年 - 100人、2014年 - 100人、2015年 - 188人の個人外国人遍路が泊まった。国別で見ると、25%はオランダ人で、次に多い国はフランス（15%）、オーストラリア（10%）、アメリカ（10%）、韓国（7%）（表1）であった。

しかし、全ての外国人遍路が宿坊に泊まるわけではないので、実際に何人の外国人遍路がいるのかを知るためには、香川県にあるおへんろ交流サロンのへんろ資料展示見学者数調が大変参考となる。その名簿は4月1日から翌年の3月31日まで計算していて、外国人は2006 -

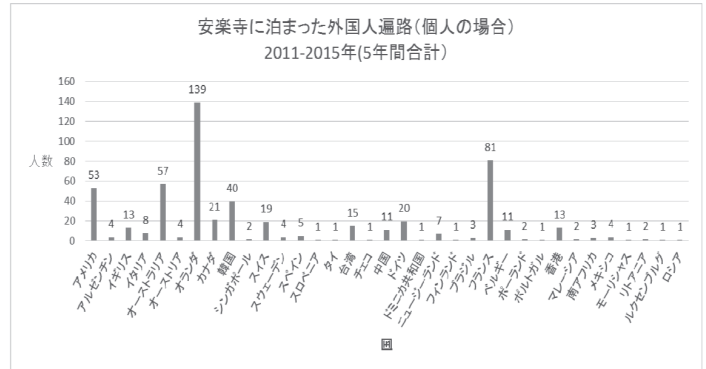


表 1

2007年は74人、2013 - 2014年は160人、そして、2014 - 2015年は404人が交流サロンを訪れている。なんと1年間で、2.5倍の人数となっているのである（表2）。

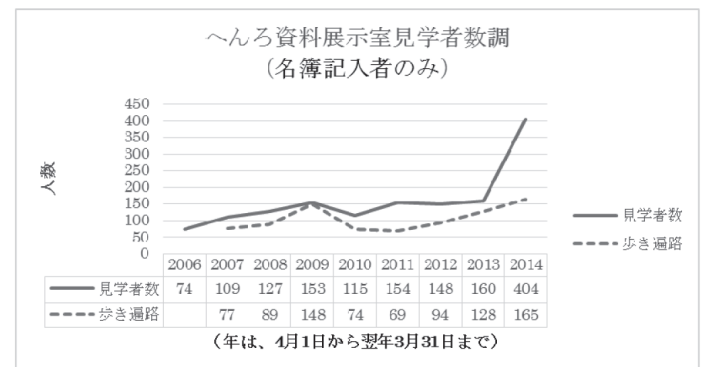


表 2

外国人遍路の増加を示すもう一つの資料は、外国人遍路が四国遍路を結願した際におへんろ交流サロンのスタッフが与える称号「遍路大使」のデータである。それによると、2004年 - 0人、2010年 - 78人、2015年 - 184人が「遍路大使」となっており、外国人遍路が急激に増加していることが分かる。国別の数は、アメリカ、フランス、ドイツ、カナダ、オーストラリア、台湾、オランダ、イギリスの順になっている。

霊山寺の前にある「門前一番街」では、その店のスタッフが外国人遍路の客数や国別の調査を2014年6月から行っている。2014年6月1日から2015年12月31日までの合計は480人で、1か月の平均は25人である（表3）。国別では、一番多い国はアメリカ、次にドイツ、フランス、中国、台湾、カナダ、オーストラリア、韓国

である。

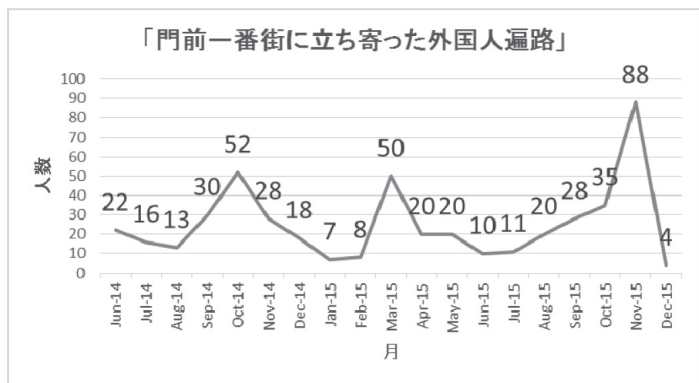


表3

(3) 男女比率

今回は、アメリカ在住のディビット・ターキントン氏と著者の英語版の遍路ガイドブック販売記録や仁庵接待所を訪れた外国人遍路の記録を用いる。ターキントン氏の100名、著者の88名、仁庵接待所の135名のデータ（合計323名）によると、男性が約3分の2（66%）、女性が3分の1（33%）である。

(4) 年代別

著者が集めてきた100名の外国人遍路のデータを調べた結果、10代が4%、20代が14%、30代が17%、40代が18%、50代が21%、60代が23%、70代が3%と分かった。20代～40代が49%、50代～70代が47%である。

(5) 感想

おへんろ交流サロンのゲストブックにある65名の外国人遍路の感想を調べると、遍路の体験を説明するためによく使われている言葉が分かる。27人が「thankful」（感謝）、20人が「kind(ness)」（親切）、18人が「wonderful」（素晴らしい）、12人が「amazing」（驚異的）、10人が「generosity」（寛大さ）、7人が「beautiful」（美しい）を使っている。3人は、難しかった、チャレンジと言っている。

4. 四国遍路の魅力や求めていること

外国人と四国遍路との関わりの歴史は100年にも及んでいることをほとんどの人が知らない。1917年、シカゴ大学の人類学者フレデリック・スタール（1858－1933）が、10日間をかけて四国遍路の半分を体験した。

その旅を終えた時、彼は八十八ヶ所霊場へのお礼状に、四国遍路の経験が「人生でもっとも面白い経験の一つ」、「私は唯一の一人の巡礼として、また言語や人種においては外国人で、仏教の信者でもないにもかかわらず、旅中親切にもてなされたことにとっても感謝している。永久に忘れられない思い出となった」と書いた。1921年にスタールが再び四国に来て、四国遍路の八十八ヶ所霊場全てを訪れている。

その後、1927年にドイツ人のアルフレッド・ボーナーが『Wallfahrt Zu Zweien: Die 88 Heiligen Statten von Shikoku』（同行二人の遍路：四国八十八ヶ所霊場）を出版した。そこには、彼の遍路体験中のエピソードや歴史などが書かれてある。また、四国遍路には教育的、経済的、宗教的な意義があると強調している。

1930年代、JTB（現在：Japan Tourist Bureau, 昔：Japan Travel Bureau）が日本についての様々な観光パンフレットを出版した。その一つが「Touring Japan – Off Beaten Track」（1934年出版）である（図1）。これは当時のJTB常務取締役の講演をまとめたものだが、四国には観光客があまり行かないことが紹介されている。1934年～1948年に、JTBは「How to see（地名）」という観光案内シリーズを出版した。1936年と1947年に「How to see Shikoku」が出版され、表紙にはお遍路さんが載っている。1936年版には、「昔から四国



図1

は巡礼者の土地として知られ、大師様の八十八ヶ所霊場は未だに保存されている。島の魅力は多くて、多様だ。しかし、それらのほとんどは海外から来た旅行者の注目を集めることができてない…日本を訪れるほとんどの外国観光客は観光客がよく行く所以外の面白い名所を常に求めている。」とある。

1955年10月、日本に滞在している米軍のための「Stars & Stripes」(星条新聞)が、四国を大きく紹介した。10月15日の新聞では、「Shikoku: Off the Beaten Tourist Path」(観光客の道から外れた四国)という題名で、善通寺、金刀比羅、松山城などを紹介した(図2)。そこには、四国に長く滞在しても他のアメリカ人を見ないことが可能だ、と書いてある。



図2

1983年にアメリカ人の日本研究家オリバー・スタットラーが『Japanese Pilgrimage』を出版し、西洋人が四国遍路について詳しい情報を得ることができるようになった。彼は1968年に初めて四国遍路を経験し、1975年に「四国遍路は生きている宗教。日本に根付いている一般の宗教理念を反映する」と言った。また、1979年には「四国遍路を理解するためには、正しいやり方、要するに徒歩でしないといけません」とも言った。2005年以降の聞き取り調査で、著者は、「どうして四国遍路をしたいと思いますか」、「動機はなんですか」といった質問を数多くの外国人遍路に行った。その結果、

次のような回答があった。「仏教に関心がある」、「空海を尊敬する」、「日常生活から脱出したい」、「お接待を経験したい」、「伝統的な日本を見るため」、「人生の転換」、「日本の文化を学ぶため」など。そして、スタットラーや遍路ツアーに参加した人が言ったように、「人と会い、地元の文化を経験し、訪問している場所を見るためには、歩くことが一番良い方法だと思う。」とも言っている。数名の西洋人は、別の巡礼道、例えばサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路(カミーノ)を経験した際、四国遍路のことを聞いて四国遍路に挑戦してみたいと思った、と言っている。

また、これまでの調査で、西洋人遍路は主に4つのことを求めていることが明らかになった。それは、日本の歴史や文化と触れ合いたい、長距離を歩きたい、チャレンジアドベンチャーをしたい、人があまり行かない所に行きたい、ということである。日本でその4つが当てはまるのは四国遍路だけである。これが四国遍路の大きな魅力であり、そのため世界中で関心が高まっているのだと思う。

5. 今後の変化とその影響

個人だけではなく、外国人遍路巡拝団などのグループも増加している。実は、ハワイからの巡拝団には日本人のバス遍路ツアーと同じような歴史がある。1953年に初めて四国遍路の巡拝ツアーが実施され、それは現在まで続いている。海外からの本格的な四国遍路団体バス遍路ツアーが増えているが、最近は観光を兼ねたグループも来るようになってきている。その一つの例が、アメリカにある Mountain Hiking Holidaysの「Shikoku Temple Trekking Tour」(四国寺院トレッキングツアー)である。その会社のオーナーは2012年に四国ツーリズム創造機構が企画した四国観光ツアーに参加し、四県を見た後、一番魅力のあるものは四国遍路だと気がつき、翌年の春から「ロストジャパンの中にある寺院から寺院へのハイキングツアー」として会社のウェブサイトに載せた。四国遍路の中で一番魅力的な部分選ばれ、チャーターバスを使用し、良いホテルを使う8日間のツアーで、航空券別で約50万円の料金にもかかわらず、大好評となり、1年先のツアーがもうすでに完売になっている。2015年の9月末に、著者は東京で開かれた Visit Japan

Travel & MICE Mart 2015に「遍路アドバイザー」として参加し、様々な国の旅行社の代表と会ったが、これから四国遍路ツアーを企画したい国（スイス、フランス、ベルギーなど）の多さに驚いた。

しかし、1993年にサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路（カミーノ）が世界遺産になり、ヨーロッパ人は身近にその前後の変化を実感しているため、四国遍路の将来を心配している人も結構いるようである。例えば、2007年にある西洋人が「外国人遍路があまり急に増加すると、遍路道の保存に大きな影響を与えるでしょう…カミーノでは訪れる人数があまりに多いために、道が台無しになって、地元の文化、宗教や環境への尊重が無くなった。」と言った。実は、私の調査では、四国遍路が世界遺産になって欲しくないという西洋人が多い。これは早稲田大学の結果と反しているが、私は2005年、2008年と2013年に聞き取り調査をして、55人の回答を得たが、「NO」の声の方が多かった。YESが15人（27%）。NOが26人（47%）。未定（両方）が14人（25%）という結果だった。しかし、外国人遍路が増加していることは現実であって、止めることができない。

2014年以降、様々な市、県、観光協会、寺院、NPOやお接待グループ、宿坊や民宿の経営者が外国人遍路（観光客）への対応・体制の不十分さに気がつき、あせっているようだ。その一つの解決方法として、NPO法人徳島共生塾一步会が2014年と2015年に「外国人お遍路さんを迎えるおもてなし実践講座」を企画し、著者が外国人遍路の実態や対応のしかたのアドバイスや英語のレッスンを地元の人たちに行った。これまで徳島県内で6回実施し、約350人が参加した。これからは、このような講座を開き、受け入れ態勢を整備することが必要であろう。

6. おわりに

およそ100年も前から、外国人は四国遍路に強い魅力を感じており、その魅力の内容（四国の人々の親切さ、お接待の心など）も変わっていないことがはっきりと分かった。この数年間、四国遍路の情報が、様々な言語、様々な方法で、世界中に発信された結果、多くの外国人が自分の求めている前述した4つのことが四国遍路にあると分かり、遍路に挑戦している。そして、データによれば、

個人だけではなく外国人遍路巡拝団やツアーグループがさらに増加する傾向にある。四国側の準備や受け入れ態勢、また世界への四国遍路の宣伝方法を考えることが今後の課題である。

【参考文献】

1. 浅川泰宏「四国遍路のグローバル化に関する一考察」（宗教研究。85巻4・p506-507）2012
2. 坂田正顕「グローバル化の中の現代巡礼の変容」（社会学年誌50号・早稲田大学・2009年3月）
3. 坂田正顕「グローバル化と現代巡礼の変容」（科学研究費助成事業（科学研究費助成金）研究成果報告書・平成25年5月16日）https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2012/seika/C-19_1/32689/22530579seika.pdf
4. ボーナー・アルフレッド（佐藤久光訳）『同行二人の遍路』（大法輪閣、2012年）
5. モートン・ディビット「現代における外国人の目からみた遍路」（四国遍路と世界の巡礼—アジアの巡礼—公開シンポジウム・プロシーディングス・愛媛大学・2005年 p58-64）
6. モートン常慈「西洋人の目で見た四国遍路—大正中期から昭和初期まで—」（『四国遍路と世界の巡礼』研究会『巡礼の歴史と現在 四国遍路と世界の巡礼』岩田書院、2013年）
7. Japan Travel Bureau. 「How to See Shikoku」（東京、1936年、1947年）
8. Japan Travel Bureau. 「Touring Japan - Off Beaten Track」（東京、1934年）
9. MacGregor, Fiona. Unpublished MA thesis. "Shikoku Henro: A Study of Japanese and Western pilgrims on the Shikoku Eighty-Eight Sacred Places Pilgrimage" The University of Sheffield, England, 2002
10. Nasu, Wayne. Untitled page. 1979 (Oliver Statler Collection, University of Hawaii)
11. Stars&Stripes newspaper (星条新聞)。1955年10月15日
12. Statler, Oliver. The Matsuyama University of Commerce Review. Feb 1975 25 (6) p. 153-176
13. Statler, Oliver. "On Writing about Japan for Foreign Readers: the Pilgrimage to the Eighty-Eight Sacred Places of Shikoku. Personal letter dated 1979. (Oliver Statler Collection, University of Hawaii)

Profile モートン常慈（もーとんじょうじ）

徳島文理大学 講師（平成28年4月より徳島大学准教授）
1969年カナダ生まれ。

ブリティッシュコロンビア大学院東洋学部日本文化専攻卒。

1999年から四国遍路研究を開始、外国人と四国遍路の歴史について焦点を当てる。著書に英語版ガイドブックの数冊と江戸時代に書かれた『四国霊験奇応記』や『四国霊験記図絵』の現代日本語訳や英語訳など。多数のテレビやラジオ番組に出演。